

鳥根県松江市の水田で発見されたヒメシロアサザ

國井 秀伸*

Hidenobu Kunii: *Nymphoides coreana* (Lev.) Hara
found in a paddy field in Matsue, Shimane Prefecture

ヒメシロアサザは、同じアサザ属のアサザ、ガガブタとともに、環境庁のレッドリストに絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）としてその名前が載せられている。本年（1999年）8月31日に、このヒメシロアサザを鳥根県松江市内の水田で発見したので、ここにその発見に至る経過と日本における新産地である可能性について報告する。

宍道湖と中海を結ぶ大橋川の河口付近にオオクグ（このカヤツリグサ科の植物も絶滅危惧Ⅱ類に分類されている）の大群生地があり、この3月から大学院生の一人が生活史関連の継続調査を行っている。8月、光合成の測定を行いたいというので調査地に同行したが、いざ測定を始めようという段になり、必要な道具を忘れてきたと彼がいうので、大学まで取りに行ってもらおうこととした。院生が戻ってくるまでの時間つぶしに、付近の水田や休耕田を見て歩いていたところ、ガガブタのような植物が、調査地からほど近い大橋川脇の水田中に点々と生えているのを発見した（写真1）。開花していなかったため確信は持てなかったが、倉敷で行われた水草研究会の観察会でちょうどヒメシロアサザを見た直後だったので、もしかするということ思いで1株を土ごと採集し、大学に持ち帰った。この株はその後大学構内で花を咲かせ（写真2）、ヒメシロアサザに間違いのないことが確かめられた。神戸大学の角野康郎さんのところでこの植物の酵素多型を調べているというので、



写真1 水田の脇に見られたヒメシロアサザ（1999年8月31日、鳥根県松江市にて撮影）。

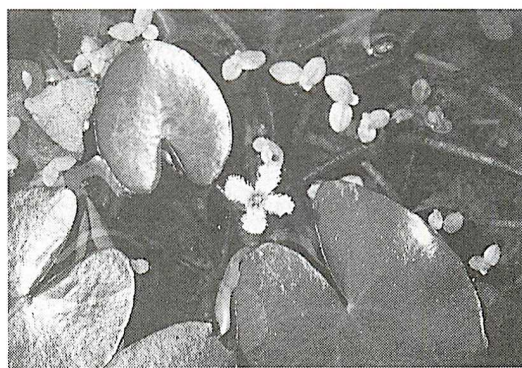


写真2 花を咲かせたヒメシロアサザ。写真の花は4弁であるが、5弁の花も咲かせていた（1999年9月3日、鳥根大学構内にて撮影）。

9月下旬にこの株を生標本として送付した。角野さんの「日本水草図鑑」にある記載どおりによく結実し、植物を入れてあったバケツ内にも多くの

*690-8504 松江市西川津町1060 鳥根大学汽水域研究センター

種子が残されたので、来春には多くの実生が見られるのではないかと期待している。

さて、今回のヒメシロアサザ自生地が新産地であるか否かについては次のような内輪話がある。県内の植物の分布に詳しく、1997年に鳥根県が出版した「しまねレッドデータブック（植物編）」の選定委員をされた生物資源科学部の杵村喜則先生にこのヒメシロアサザの自生について報告したところ、1989年に出版された「我が国における保護上重要な植物種の現状」の都道府県別リストの鳥根県の項（249ページ）に、ヒメシロアサザの名前が出ているとのことであった。もしそうであれば、以前に県内のどこかでこの植物が見つかったことになる。実は、杵村先生はこの出版物作成の協力者でもあったが、杵村先生自身はヒメシロアサザを鳥根県内で見たことは無く、この記載については恐らく作業委員の方が加筆したのではないかと考えている旨の発言をされた。そこで、事の真相を知るべく作業委員の一人であった村田源先生にこの件について手紙でお尋ねしたところ、先生はわざわざ京都大学所蔵の標本を調べられ、鳥根県産のヒメシロアサザ標本は無いことを確認して下さった。さらに、当該の出版物は事務局で編集印刷し自分のところへは校正が回ってこなかったこともあり、村田先生自身は249ページにヒメシロアサザの記載があることを今回初めて知ったこと、また都道府県リスト作成の元となっ

た全国リストが当時の信頼できる情報であり、都道府県リスト作成の段階で入力ミスあるいは誤情報の混入があったのではないかとのご回答を下さった（行政官庁の出版物にはこうしたことがよくあるので、学問的な報告の引用には気をつけるようにとのご指摘も同時に頂いた）。「鳥根」という県名は、全国リストのヒメシロアサザの項（229ページ）にはなく、環境庁のレッドリストにも出ていない。

村田先生からはヒメシロアサザの分布は「日本水草図鑑」の分布図が一番参照に値するとのコメントも頂いた。この分布図によれば、ヒメシロアサザは日本海側にはほとんど分布せず、わずか九州に2点を数えるのみである。

以上のことから、今回のヒメシロアサザの自生地は日本における新産地である可能性が高い。付近の水田もヒメシロアサザが自生していた水田と同じような環境下にあると考えられるので、ヒメシロアサザが他の水田にも分布している可能性は高い。ヒメシロアサザを発見した水田とその回りの水田にはミズワラビが多産し、また付近の休耕田ではイヌビエやコナギに混じってミズアオイも見られた。今回の調査地付近の水田は湿田であり、伝統的な水田環境が守られているのかも知れない。水田における水草の分布はこれまで研究の対象としていなかったが、新たな課題ができたようである。